



## 幼穂形成期～出穂期は適期追肥と適切な水管理に努めましょう！

### \*生育状況\* (調査日7月1日)

6月中旬以降気温が高かったことから分けつが進みました。

幼穂形成期は、はれわたりで7月7日頃、出穂期は7月30日頃と予想されます。

穂ばらみ期は特に低温に弱い時期なので、寒い日は深水(15cm以上)にし、幼穂を保護しましょう。

管内生育観測圃 生育調査結果(7月1日調査)

品種	草丈(cm)		茎数(本/株)		葉齢(葉)		幼穂形成期	
	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
はれわたり	47.3	48.8	20.1	18.6	8.2	8.4	7月7日	7月8日
まっしぐら	54.0	48.2	23.0	17.8	8.4	8.2	7月8日	7月11日
青天の霹靂	53.6	48.0	17.9	17.9	7.9	8.1	7月8日	7月8日

### 水管理

生育時期	期間	寒い日	温かい日	ポイント
幼穂形成期 ～10日間	7/7～ 10日間	10cmで10日間		低温・干ばつに弱い時期。 花粉の元となる細胞の数が決まる時期。
穂ばらみ期	7/17～	15～20cm	4cm程度 (時々、水の入 替えやかかけ流し)	低温に最も弱い時期。 低温は、花粉の退化など不稔の原因になります。 根の老化が始まるため、時々、水の入替えやかかけ流しを行い酸素を供給する。
出穂・開花期	7/30～ 10日間	10cm	5cm程度	最も水を必要とする時期。(花水) 低温は、開花・受精に障害をきたします。
登熟期	8/9頃～	10cm	2～3cmの浅水	間断かんがいで根に酸素を供給し、生育後期まで根を働かせる。

### 胴割粒対策

出穂後10日間の最高気温が30度を超える場合、胴割粒の発生が多くなる恐れがあります。

水の入換え・かけ流しを積極的に行い、『稲体の温度を下げて』胴割米を防ぎましょう。

### 追肥

生育量や葉色を見ながら追肥しましょう。目安は窒素成分で10a当たり2kg、NK25号又はつがるの追肥(1袋/10a)です。

葉色が濃い場合は幼穂形成期から10日後にもう一度確認し、葉色が淡くなってから追肥しましょう。

分けつが多い場合や葉色が落ち着かない場合は追肥を中止しましょう。

	幼穂形成期前 ～7月6日頃	幼穂形成期 7月7日頃	減数分裂期 7月14日頃	減数分裂期以降 7月15日～
追肥の影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>× 過剰な分けつの発生</li> <li>× 生育の遅れ</li> <li>× 倒伏の危険増大</li> </ul> ↓ 収量の減少	← 追肥適期 → 穂数確保    粒数確保    玄米肥大促進		<ul style="list-style-type: none"> <li>× 増収効果が低い</li> <li>× 米の食味低下</li> </ul> ↓ 食味・品質の低下

### いもち病対策

いもち病は、葉の色が濃い水田で発生しやすいため、幼穂形成期から10日後になっても葉の色が落ちない水田では、追肥を中止しましょう。

穂いもち病の防除については、出穂直前の予防散布が重要です。葉いもち病の発生が見られる水田では、ノンプラス粉剤(4kg/10a)を散布しましょう。ノンプラス粉剤は、青天の霹靂には使用できません。

### 薬剤散布 航空防除実施していない場合

散布時期	出穂10日前 (7月20日頃)	出穂直前 (7月26日頃)	穂揃期(8月1日頃)	穂揃期7～14日後
病害虫	稲こうじ病	いもち病	いもち病・カメムシ類	カメムシ類
薬剤	Zボルドー粉剤 (3～4kg/10a) 前年発生が多かった水田は散布して下さい。	ビーム粉剤 DL (3～4kg/10a)	ビームスタークル粉剤 DL(3～4kg/10a) またはスタークル1和粒剤(1kg/10a)  例年斑点米カメムシによる被害がみられる水田では、「穂揃期」と「穂揃期7～14日後」の2回防除を行いましょう。	ダントツH粉剤 DL(3～4kg/10a) またはスタークル粉剤(3kg/10a)

青天の霹靂はZボルドー、ビーム、スタークルが使用できます(各剤1回まで)

### カメムシ対策 (草刈り)

定期的な草刈りは出穂2週間前(平年7月20日頃)までこまめに実施して、その後は出穂4週間後(平年9月上旬)までは控えるようにしましょう。出穂後の草刈りは、カメムシを水田に追い込んでしまいます。

**航空防除の旗は7月15日までに設置をお願いします(散布日は後日お知らせいたします)**

